



TITLE:

[近]世に於ける氣候變化と農作豊凶
に關する一資料に就いて

AUTHOR(S):

内田, 秀雄

CITATION:

内田, 秀雄. [近]世に於ける氣候變化と農作豊凶に關する一資料に就いて. 地球 1937, 27(5): 359-379

ISSUE DATE:

1937-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184686>

RIGHT:

近世に於ける氣候變化と

農作豐凶に關する一資料に就いて

内 田 秀 雄

端を附加したいと思ふ。

一
近江國野洲郡田中に、徳川中葉、百數十年（明曆三年——文化十一年）に亙る農作豐凶の大體を記録した、「蓮花立覺留日記」なるものの存することは、既に、故橋川正に依つて、野洲郡史（昭和二年）に引用報告せられてゐる。しかし、

尙、本稿を草するに當つて、門外不出を家憲とせられた貴重本の借覽を快く許された、田中家の當主、源兵衛氏の御厚意をこゝに深謝する次第である。

二

さて、「蓮花立覺留日記」とは如何なるものであるか。前述の田中村に（現在は河西村字田中）勸兵衛と稱する舊家がある（又は源兵衛とも言ふ。一代毎に勸兵衛、源兵衛と送稱せられる。所謂「勸兵衛、源兵衛」であつて、現在は源兵衛と名乗つてゐる。）同家には、傳教大師の御作と稱す

雅の一餐に供すると共に、併せて聊か愚考の一

る座像の大日如來を安置する「大日堂」なる持庵があり、その大日堂の前方に十間四方の蓮池がある。この蓮池が所謂「雙頭蓮」を以て近隣にその名の知られてゐたものである。この雙頭蓮と言ふのは、同家に傳へられてゐる「江州田中村雙頭蓮記」（文化元甲子藏季春上潁）なるものに依ると、勿論この文献がどの程度まで信用さるべきは疑問であり、このことに關しては該記の

作着も既に自ら「是說雖未覽實證憑據姑記世之口碑焉」と告白してゐる位であるが、とにかく、この池の蓮は定惠上人（建徳元年寂・皇二

〇三〇）が入宋して、歸朝の際、南天の太祖、達磨大師が梁朝に來り獻ぜられたと言ふ蓮の一種を持歸つて、これを田中村のこの地に植られたのに端を發してゐるのだと言ひ、その特徴は一莖に二花より十二花を着けることである。多くは四花、又は六花である。莖の先端がY字狀に二分し、その先に夫夫花を着けるもので、花は多く着けるために普通の花よりも著しく小であ

り、閉花の後もその花瓣が凋落せず、萼に粘着してをり、結實することは稀である。その花をつけた地上莖は所謂蓮の絲を缺き、これに關しては興味ある傳説すら作られてゐる。（註）

かくの如く不思議なる蓮であるために、近隣相傳へ、古くは足利義滿、之を奇として、その採伐を禁じたと言傳へられ遂には後櫻町天皇の御覽に供し奉つた。京畿の諸大寺、雲卿紳士より和歌漢詩などを寄せてゐるもの甚だ多く、それらの今に保存されてゐるものも少なくない。

この蓮と萬物の本源、太陽神とも考へらるゝ大日堂の大日如來との信仰とが結合して、堂前の蓮花は大日如來の豫言的表現としてみられるやうになつて、何時の間にかこの蓮花の開花數の多少は直ちに以てその年の農作物の豊凶を示すものであると一般に信ぜられるやうになつたものらしく、従つて、この蓮花の開花數を丹念に記録し、併せてその年の作柄をも記録し、大日

如來の威徳を渴仰するやうになつた。これが亦後述の如き理由に依つて比較的よく的中したため益々長く記録されたものと考へらる。この記録がこゝに謂ふ問題の「蓮花立覺留日記」と稱するものである。この日記は、文化十一年以後のものは傳つてゐないが、この蓮花に關する信仰は今に尙生命を有するものであつて、去る日、私が丁度該蓮池の近邊に立つてゐると、そこを通りかかつた一人の農夫と村夫子然たる男とが、しばし蓮池の側に立止つて、今を盛りと咲き誇る多くの蓮花を一種驚きの眼を見張つて互に今年も豊年なる旨を語り合つて行くのを目撃したことであつた。

しかし、惜む可し、この名花も如何なる原因に依つてか、明治二十九年の野洲川堤防決潰による洪水の翌年、即ち、三十年より咲かなくなり、普通の在來の蓮花に變化してしまつた。現在では一本も往昔の如きものを見ることは出来ない。たゞ、嘗て咲いた枯れ花を見本として、

見得るに過ぎない。三好博士などの研究せられて、その變化の原因を探索もせられたが、結局現在のところでは原因不明で、恐らく、洪水などによるに養分の變化などの關係を契機として雙頭なる變種が、又もとの種に還元したものであらうと想像されてゐるとの事である。従つてしばし乙夜の覽に供せられた名蓮も、今は一本も實物の發生せざるため、あたは天然記念物としてすら指定されてゐない。とは言へ、歴史的に觀て、天下の奇蓮たるを失はない。

註、「江州田中村雙頭蓮記」に「當麻中將法女亦紡是藕絲織曼陀羅云云」とあるが、これは「當麻曼陀羅緣起」の「(上略)ひとり比丘尼きたりていはく、祈念のこゝろざしを見るに、隨喜のおもひにたえずして、われこゝにきたれり。九品の教えをおがみたまつらんとおもはじ、われその相をあらはすべし、すみやかにすのくき百駄をあつむべしといへり、願文の尼このことをうけて、天聽におよぼすに、忍海連におほせて、近江國の課役として、たちまちにもよをしあつめたり、こゝに化尼さとりをえてきたれり、みづからはすのくきをおりていとをいだすことわずらいなし」(下略、肩點筆者、群書類從釋家部)とあるに、附會したも

のであらう。尙田中家には當麻寺に雙頭蓮を進献した受領證が現存してゐる。

又この附近に眞宗十派の一本山なる錦織寺があるが、同寺の創設傳説とも附會してゐる。即ち、親鸞が上洛の途、ここにあつた天安堂に立寄つた所、或夜寅時、天樂空に聞え奇芬室に満ち、佛殿に聲があつたから、彼がこれを窺ふに内陣にて二人の天童が佛に對して糸を繰り、天女は機を繰りつゝ且に至つて失せた。佛前には紫光錦一鋪があつた。これが天神護法錦織寺號の起りであるが、この絲が雙頭蓮の藕絲に依ると言ふのである。而して該蓮に藕絲なきは、これに由來するものであると誠にやかに信ぜられてゐる。

三

「蓮花立覺留日記」は全部で四冊であるが、第一、第二、第四冊は半紙假綴、第三冊のみ美濃紙假綴となつてゐる。第一冊表紙には

明曆三年正徳六年迄之書印

蓮花立覺留日記

田中村

田中勘兵衛

とあり、裏紙には

數冊ニ致テ有候得共當年壹冊ニ寫整仕候

正徳六年申二月 日

末ニ又毎年右之通ニ書記可申候爲其如此ニ御座候

と書いて、子子孫孫に至るまで前代の如く書留む可きことを要求してゐるのである。

前記の表紙記載の如く、第一冊は明曆三年から正徳六年までの六拾年間の記録であるが、この六拾年間の記録には精粗があり、元祿十四年よりは段當りの米の收獲量をも記入してゐるがこれは筆者の異なる數冊のものを一冊にまとめただからであらう。

第二冊は享保二年より寶曆二年までの三十六年間の記録で、最初は稍細密に記録されてゐる。

第三冊は寶曆三年より天明二年までの三十年間が記載されてゐるが、あの有名な天明の飢饉の前年を以て終つてあり、しかも第四冊は寛政十一年から始つてゐるため、天明の頃の狀況を知ることが出来ない。

第四冊は寛政十一年から文化十一年までの僅か十六年であり、且つ、その記述も不完全なも

のが多くて、價値の比較的少ないものである。

以上の四冊、結局明暦四年より文化十一年までの百五十八年の記録であるが、その間前述の如く十六年間も缺けてゐる所があり、又一部分記載の脱落してゐる所もあるから、完全なる資料としては實際は百三十七年間の記録である。

さりながら、徳川中葉に於けるかかる比較的長期に亙る豊凶天災地異に關する記録は單なる地方資料としても興味の少ないものではないが、それは二次的なものであつて、この日記の目的は實に蓮花の開花數を記録したものであるから、これを我々は注意しなければならない。ここにこの日記のもつ歴史地理學的な興味があるのである。

四

一般に、植物はその地の氣候狀態を敏感に反應するものである。植物の發育狀況の如何は直ちにその年の氣溫狀況を示すものであるとして植物を以て時間的に氣候狀態、特に精密なる測

量機械を缺く時代の氣候狀態の研究にしばしば利用せられ、空間的にもある時期は於けるある特定の植物の開花の狀況に依つてある地域の氣候狀態を調査することの行はれてゐることは珍らしくない所である。

然るに、この場合、蓮は言ふ迄も無く、印度原産の熱帶性植物であるため、その性質上氣溫に對しては最も敏感である。従つて、蓮花開花數の多少は大體その年の氣溫狀態を示してゐるものと徹しても大差はないものと思はれる。ことに、この神聖視された雙頭蓮は、義滿より下附されたと言ふ法度にも示されてゐる如く、例へ「落葉たりとも取申間敷者」として、禁止されており、又該日記の安永九年の項にも記載されてゐる如く、泥上げをしたり、他に手を加へることは殆んどなく、安永九年の泥上が百二十年來の事であつた位であるから、勿論、肥料の如きものは一切投入せず、現在に於いても、他に投入されるものは例年一回さる魚問屋が放生のた

めに鯉を若干放つのみであるから、人爲的に蓮の開花に影響すべき何等の原因はないとみてよいのである。故に蓮花數の多少はその時の氣溫を示す寒暖計であり、蓮花の一本一本は寒暖計の度數にも比較され得るのである。この意味に於いて、信仰的立場より丹念に記録された蓮花の數は、これを科學的にみて甚だ價値の多いものであると言ふことが出来る。

しかも偶然にも、この地方は湖岸・山際より相當はなれ、近江國湖東南部地方の略中央にあり、近江の南西部地方の一般の氣候狀態を示すものとみて差障りがないのであるから、益、その價値の少なくないことが解るのである。

又、前述の蓮花立數の多少と農作、この地方では主として稻作の豐凶との關係も、之を神秘的に考へなくとも科學的にも説明し得られるのである。即ち、稻・蓮ともに印度原産の熱帶地方のものであり、且つ、その成育には共に多量の水分を必要とする。しかも、蓮は稻よりも、稍、

速かに成長するために、蓮花の生長狀態、特に開花の多少を以て、蓮よりも遅れる所の稻の収穫を豫想することも不可能ではない。勿論、稻は九月十月の秋の氣候狀態の如何にも關係する所は少なくないが、大體は七、八月頃の所謂「青田」の狀況に依つて想像が出来るのである。現在毎年、農林省の發表する收穫高豫想のための第一回、水稻作況の發表が八月十五日現在を以てなされてゐるのも、この事情を語るものである。

五

さて、日記であるが、名前は日記となつてゐるが、實際は一年毎に誌したものであるから、年記と言つた方が正しく、その形式は第一冊の最初の頁を例示すれば、略次の如きものである。即ち、

明曆四戊戌年 萬治元年と御改元有

此年蓮花廿五本立世中殊外吉穀物大分有
大豆吉畑物大吉

茲では便宜上、蓮花立數と豐凶に關する必要と思はれる部分のみを抄録して、これを年表風のものにしてみた。

蓮花立年表

年代(皇紀)	蓮花立數	豐凶に關する記事	參考事項
明曆三年 (三三一七)	一三		
萬治元年 (二三一八)	二五	田畑共豐年	京都大風雨、加茂大洪水
二年	一七	田普通、畑不作	夏霖雨○七月江戸大雨洪水
三年	三	殊外惡敷事多く有、世中久々穀物惡敷不作難義多し、さこね畑水押仕難義者其多有之候	五月霖雨洪水多し○七月諸國大風雨洪水○八月京都及諸國大風雨洪水○九月京畿四國及江戸大風雨
寛文元年 (二三二一)	〇	世中殊外不作故難義者其多有	七月土佐洪水○八月又洪水堤防決潰す
二年	七五	作物大吉祥々悦申候	六月諸國大水

近世に於ける氣候變化と農作豐凶に關する一資料に就いて

三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	一〇年
九	二七	一一五	八〇	一八	五	四九	一
作物吉大豆猶吉畑物吉皆々悦申候	作物大吉大豆小豆吉畑物大吉悦申候	麥作吉田畑共二十年此方之豐年悦申候	麥吉、田作吉畑方不作	作物中分大豆小豆吉、さこね水押殊外不作	作物田方中分大豆、小豆大吉	田作吉、大豆小豆惡敷、さこね水押故不作	作物田畑共惡敷難義仕り候、さこね畑庭々水押申候
八月京都洪水加茂堤防決す	七月京都大風○六月土佐大風雨洪水		七月諸國大雨洪水、土佐伊豫殊に激なり○冬北海道飢ゆ		諸國大旱○六月加能越大風雨洪水、近江一萬二千石	四國筑豐肥雲州等諸國大水○是歲諸國饑民多し	八月、九月攝津播磨諸國大風雨損害多し

七 年	六 年	五 年	四 年	三 年	二 年	(二 三 三 三) 延 寶 元 年	一 二 年	一 一 年
六 七	九	一 八	四	九 八	七 六	四	三 七	一 五
作物品々吉	作物品々惡敷田 作吉大豆不作、 さこね畑水押不 作	大麥吉、小麥中 分田作中分大豆 小豆吉	作物中畑方吉 さこね畑大吉小 豆吉	作物田方大吉大 豆中分、さこね 畑水押有共吉	作物田畑共殊外 大吉、さこね畑 吉悅申候	作物中分大豆小 豆吉	作物田畑共豐年 悅申候	作物田畑共豐年 さこね畑大吉悅 申候
八月肥前洪水	七月伊豫及豐前大風 雨洪水○八月筑後肥 後及豐前洪水		夏霖雨○五月畿内大 雨洪水○七月東海道 大風洪水	六月美濃大風雨洪水 ○春諸國大に饑ゆ	四月、六月畿内大雨 洪水○六七月寒冷諸 國飢饉	五月九州中國山陰南 海洪水		八月江戸及び東海諸 國大風雨洪水

二 年	(貞 享 元 年 二 三 四 四)	三 年	二 年	(天 和 元 年 二 三 四 一)	八 年
○	○	二	二 八	七 七	九
作物品々惡敷難 義者多有	作物品々惡敷難 義致候	大麥小麥惡敷田 作中分、さこね 畑度度水押難義 いたし候	作物麥作中分田 作わせ吉中で吉 おくて惡敷大豆 小豆中分畑物吉	作物麥作惡敷田 作吉大豆小豆吉	作物大麥小麥吉 田作中分大豆小 豆吉
		正月江戸風雨洪水○ 六月以降大旱金一兩 米一石六斗に宛つ		正月京都大風雨○八 月京都大風雨洪水諸 國洪水○是歲飢饉	夏霖雨、東海道諸國 水災家流人死す○岡 八月江戸及び東海道 沿道大風雨損害多し ○その後雨なく燥 旱年を終ふ○五畿關 東飢饉饑屍路に横は る

三年	七	作物麥小麥吉田 作中分大豆小豆	五月近江洪水
四年	九八	麥小麥吉田作吉	九月畿内大風洪水
元祿元年 (二三四八)	五六	麥作吉田作吉悅 申候	五月京都洪水
二年	二	作物田畑共中年	
三年	一九	作物麥吉田作吉	八月大雨京都及畿内 諸國洪水
四年	一八	作物麥作田作吉 悅申候	八月京都大風
五年	六九	作物田畑共萬吉	
六年	八六	作物品々吉悅申 候	正月京都大風
七年	三九	作物吉	
八年	一〇一	作物田畑共吉	七月京都大風洪水○ 陸奥飢饉
九年	四八	作物田畑共吉	六月京都洪水○七月 大風
一〇年	八一	作物萬吉	

一一年	一五八	作物品々吉皆々 悅申候	
一二年	二三	作物田方吉畑方 不作	六月大旱
一三年	四	作物不作故難義 致候	
一四年	七二	作物田畑共吉一 段ニ付五俵二斗 當	自四月至六月大旱
一五年	九七	作物田畑共大吉 一反付六俵半當	七月京都大風雨、土 佐又大風雨洪水○八 月松前風雨洪水
一六年	一一九	作物田畑共吉一 反付六俵一斗五 升當	六月松前大風雨
寶永元年 (二三六四)	九九	作物品々吉一反 付六俵一斗六升	二月京都大水○夏霖 雨洪水○七月土佐大 風雨洪水
二年		作物田畑大吉一 反付六俵當	六月參河遠江大水
三年	二三五	作物三十年此方 大豐年悅申候一 反付七俵當	六月土佐風雨○八月 對馬大風○十一月大 阪大風

近世に於ける氣候變化と農作豊凶に關する一資料に就いて

四年	三年	二年	(正徳元年 二三七一)	七年	六年	五年	四年
三二	三八	四	一五	五三	九五	六八	八九
義いたす者多	作物田畑共吉大 豆小豆吉。一反 付五俵當	作物田畑共中分 四俵半當	田畑共中分作一 反付四俵半當	作物中分、さこ ね水押中年上年 一反付五俵當	作物田畑共吉一 反付六俵五斗有	作物田畑共中分 大豆吉一反付四 俵半當	田畑共一反付四 俵二斗五升當大 豆小豆大不作
諸國飢饉疫病流行	八月攝津洪水	八月山城、攝津洪水	八月大風	四月、八月土佐大風 雨○八月京都大風雨 ○是秋大に旱す	七月畿内諸國大風○ 琉球大風饑死者多し	三月、六月、七月京 都大風雨洪水○七月 諸國大風	八月、九月京都大風 雨禾を損す

八年	七年	六年	五年	四年	三年	二年	(享保元年 二三七六)	五年
二七	五六	九一	八一	七七	六二	五〇	一五	六
田畑共吉大豆不 作一反付共俵半當	田畑共吉大豆吉 七俵	田畑共豐年六俵 三斗五升	田畑共吉大豆猶 吉六俵三斗當	田畑共吉一反付 六俵半當	田方吉畑物惡敷 一反付六俵半當 さこね水押不作	田畑中分一反付 四俵三斗五升當	田畑共吉さこね 水押一反付四俵 三斗當	田畑共中分、さ こね水押一反付 四俵三斗七升當
正月京都大風○春諸 國痘瘡流行	六月土佐洪水○八月 京都大風雨○飢饉	閏七月京都及諸國大 雨洪水○春飢饉	十二月京都大風雨			夏大旱秋蟲あり五穀 熟せず○八月關東諸 國大風	五月山城諸川洪水	六月京都洪水

九年	三二	田畑共吉、さこ ね水押六俵半當	二月京都大風雨雷雨
一〇年	(二本朽)三	田畑共大不作難 義者多く有	春旱魃夏霖雨多く秋 亦旱す
一一年	一〇	作物麥吉田畑大 吉	二月越前洪水
一二年	(二五)三〇 (本朽)	麥大吉、日てり がち田作吉大豆 不作	
一三年	(二本朽)九	作物田畑共大不 作大豆猶不作	霖雨多く、七月畿内 洪水あり〇八月東西 諸國洪水海溢〇九月 江戸洪水
一四年	九	田畑共大吉米大 分有悦申候	春大旱夏霖雨〇對島 大風雨〇九月京都大 風雨
一五年	三五	田畑共大吉米十 匁に斗九升致す	七月京都大風雨
一六年	二	田畑共不作、大 日てり難義致す 大豆吉米一反付 二俵三俵迄	七月遠州大風

一七年	〇	大麥小麥大不作 田畑共大不作飢 死大分有、西國 ハ猶、不作故飢 死數萬人有	春諸國霖雨多し、夏 西海山陽南海蝗蟲發 生す、秋洪水汎溢禾 穀悉く耗す〇山陽西 南海海蟲害洪水大に 飢饉す。所謂享保の 大飢饉是なり
一八年	二八	作物わせもち殊 外吉おくて中分 大豆吉畑物品々 大吉悦申候	八月江戸大風
一九年	一五〇	田畑共中年他國 吉米下値ニ成	自夏至秋諸國洪水〇 七月江戸大風
二〇年	二三	六月廿二日大風 有夫故五本吉花 成、殘朽る〇作 物四方中分畑方 殊外不作難義、 諸國共大風大水 家流事諸々有	七月畿内及江戸大風
(元文元年 二三九六)	(一三五) (本朽)	作物田畑共殊外 不作難義致す者 多し、浦方大水 故殊外難義者多 有之	十月諸國大風雨

近世に於ける氣候變化と農作豐凶に關する一資料に就いて

二年	○	作物悪敷大水、 さこね畑度々水 押開無、浦方大 水故難義致す	三月京都大風
三年	○	田畑共大不作、 さこね度々水押 藁一本大根一本 も無難義迷惑仕 り候浦方大洪水 より床上一尺二 尺水つき殊外難 義迷惑致事五十 日ニ候	八月京都大風
四年	七	田畑共吉浦方 少、得申候	
五年	五	田畑共中分	六月畿内洪水、閏七 月京都又洪水
寛保元年 (二四〇一)	五	作物田畑共吉	
二年	八	田畑共、さこね 畑水押	六月土佐洪水○八月 五畿東海北陸諸國洪 水
三年	六	作物田畑吉大豆 中分	

二年	二	田畑共中分、さ こね水押	八月山城宇治洪水
三年	三七	田畑吉大豆小豆 中分	京都大風雨
四年	一九	作物田作吉大豆 小豆畑方不作	
寛延元年 (二四〇八)	一二	作物田畑共吉大 豆吉	
二年	二八	作物田畑共吉	五月土佐洪水○七月 播磨丹後但馬大洪水 ○八月江戸大風雨○ 土佐陸奥飢饉
三年	六七	田畑共吉大豆小 豆中分	京都大風雨
寶曆元年 (二四一一)	一一	田畑共中分大豆 吉	
二年	二四	田畑共吉大豆吉	
三年	六	此年大豊年也	
延享元年 (二四〇四)	一七	田畑共吉大豆小 豆吉	五月奥州弘前洪水○ 七月京都大雨洪水○ 八月松前大風雨

四年	五年	六年	七年
五三	一	二	六
世中分、米一石ニ付四十五匁相成申候	此年當國中、東國西國共惡敷云 米高値ニ成九十目相成難義之者共多く有	此年九月十六日大風殊外大水にて野州川筋堤二十ヶ所切申東近江水おし大分有然共江内不難故大悦申候又十月三日大風大水有世中不作、近江國ノ不作にて他國吉にて大豆一反付二斗位有候	世中分大豆吉 畑方萬吉
七月土佐大風雨○秋北海道飢饉	六月肥後洪水○八月西海道大風雨○陸奥飢少	夏霖雨關東洪水○九月畿内及諸國大風雨澁伏見洪水○十月山城	霖雨、四月東海北陸洪水○七月土佐洪水○秋東海山陽諸國洪水多し○奥州飢饉○江戸米價騰貴

八年	九年	一〇年	一二年	一二年	一三年	明和元年 (二四二四)
一〇三	六	〇	二	二二四	八七	四
此年中年也	蓮花六本立殊外見事ニ喉申候此年五十年此方之大豐年也浦方も百年此方大豐年にて穀物品々下値相成申候	大豆殊外不作わ世中分中おくと大豐年米殊外下値	大豐年			五月十七日ニ一本立、五月より節十一日に相當り同二十一日日二本立、土用入
十一月畿内及近江大風雨雷			二月若狹大風○六月大阪大風雷	九月五畿及西國大風雨		

近世に於ける氣候變化と農作豐凶に關する一資料に就いて

三年	二年	
二	〇	
	<p>世中惡敷大豆一反付二斗より三斗迄有、浦方無毛難義者共多し、殊外大風水有堤切れ多有人死大分有野州郡内外郡部大分人死有、當村江内堤不難作物江内中分外村惡敷、さこね畑皆無也</p>	<p>日一本立、皆々不殘朽ル 此年六月廿九日大風有土用之内也七月十五日に大風有、八月三日大風水有、此年わせ中て不作おくて吉大豆中年</p>
夏淡路大旱〇七月江戸洪水大風〇十二月京都大阪大風		

七年	六年	五年	四年
一三	四	五四	六五
<p>此年八十三日ひてり、五月廿八日大雨ふり申候その後てり上り七月廿四日雨ふり夕たち間六日有、畑方八分作八月十二日ふり、野州川二百三十日水なし、極月十五日水出</p>		<p>此年浦方大水田作皆無、作物不作畑方猶不作餅一反付三俵位有西國ハ吉候難義者多有</p>	<p>此年わせ不作大豆不作おくて豊年、浦方殊外満作米大分有二十年此方豊年悦申候</p>
<p>夏諸國大旱〇武藏蟬あり〇七月京都大風雨洪水〇疫疫流行死者多し</p>	<p>八月山城洪水東國又大風雨〇春諸國風疫流行</p>	<p>五月畿内洪水</p>	<p>七月尾張三河洪水</p>

(安永元年 二四三二)	八年
○	六
	初花五月廿日半 夏生日也此年四 月朔日より日て り、六月廿六日 迄日てり、八十 五日日てり川田 村田地植付不成 難義致す、土用 六月八日入、土 用水かへ致、植 付致、皆々不植 六月十二日夕た ち水有、植付半 分余り致す、こ の日てり野上井 水かへ水致田地 水入 七月廿二日大風 北風也、大水堤 切大分有、中野 村二百八十間切、 野州村百三十四 切、南堤三十間 切、田場村切、林 村切、十五堤切
肥後肥前筑後大風雨 洪水○八月關東大風	三月京都大洪水○七 月廿二日畿内及伊賀 伊勢洪水

四年	三年	二年	
○	三〇	○	
四月十七日より 雨降り續き六十 日間日和なし、 青田に小蟲付尺 取蟲如成蟲也一 反に五六升宛あ り日てり上り巾	六月四日蓮花一 本立始段々相立 申候六月廿三日 大風五十年此方 大風家損す	六月十六日一本 立又十八日一本 立皆朽 六月二日大風大 水同十九日大風 大水二度浦方水 一尺六寸増七月 十日大雨大風大 水、浦方二尺七 寸増、中野堤切 三度四尺三寸水 増	
夏霖雨○六月山城掘 津洪水	六月二十三日京都及 諸國大風雨	七月京都及美濃大風 雨水	雨比隣諸國大風雨損 害多し○諸國疫疾流 行死人多し

近世に於ける氣候變化と農作豐凶に關する一資料に就いて

八年	七年	六年	五年	
〇	〇	二七	一〇	
七月畿内大風雨洪水	七月二日大雨にて京大水にて人死大分有同年夏大水有六尺増	五月廿一日一本立、五月節より廿一日也其後段々立申六月土用大雨ふり四十本斗朽る、その後立廿七本	此年五月十一日に一本立世中中分吉	候得共蟲なりし故此年早物惡敷おくて物吉大豆よし、さこね畑水度庭上る故畑物皆無雨ふりかち也
	七月京都大雨洪水〇八月伊勢大風	七月陸奥洪水下總亦洪水〇八月肥前肥後筑後大風洪水		

寛政 一一二年	一〇〇	(この間十六年を缺く)	九年	(三五〇 本朽十)	蓮池之泥上ケ七日掛り自身ニ特を致三月四日成就致す、七十五歳自身致大變奉存候百二十年此方事上花五十本立三十本朽	〇八月東海東山北陸三道洪水
二年	一		天明元年 (二四四一)	六〇	蓮一本立又一本立候へども花不開、世中殊外不作米高値也難義者多有	春霖雨天寒冬の如し 〇六月京都大阪洪水 同江戸及近傍諸國洪水 〇七月陸奥津輕洪水
					正月津輕大洪水〇七月陸奥大隅日向大風 〇同月畿内大風〇秋風疾流行	
					春霖雨夏畿内大風〇五月伊勢大風〇七月上佐大風雨洪水	

(享和元年 二四六)		
二年	三年	二年
三		
蓮花三十本相立候へども三本花ニ相成申候然者當年六月廿九日夜大雨大風にて夜六つ時八幡宮様堤土堤五回相切掘家ニカノ上二尺ホトツキ申候七月五日迄ヒラナガレニテ御座候	此年之切所大ク御座候又八月六日二百十日之夜大雨大風ニ大キアヤウキ事此年ふしん出ケ不申候川トメノママにて御座候	五月十一日大雨にて川すじ水をし大日堂へ水入申候田畑平作分なし
春霖雨○六月七月江戸及び諸國風雨洪水○七月京都旋風○春諸國風疾流行		大旱近江湖水涸るゝ事七尺○江戸連日雨なし

(文化元年 二四六四)				五年
二年	三年	四年	五年	五年
一〇三		八八		一一一
六月三日より立始米二斗二升	此年五月十七日初テ蓮花立	五月廿三日大雨大風にて此夜大水出大キニさわぎ申候六月十日初テ蓮二本立	蓮花六月一日より初テ立此年一反ニ付米五俵づゝ御座候	五月四日より立始七月十日花立此年麥六分方御座候、田畑九分米九月ニ而わせ二斗五升十歩ニ付
	夏諸國大旱	六月廿三日山城大雨淀河決す河内大水	六月江戸諸國洪水○閏六月諸國大風○七月江戸及近傍國風雨洪水○八月江戸及東北諸國洪水	

近世に於ける氣候變化と農作豐凶に關する一資料に就いて

六年	約一〇〇	此年日てリニ御座候米一反付七俵づゝ麥種よし	八月關東大風雨
七年	約二〇〇	六月十七日初テ立麥種よし	
八年		五月十八日より蓮花立初當年米一反ニ付六俵づゝ御座候	
九年	約一〇〇	六月二日蓮初テ拾五年立申候、此年田畑共十分御座候一反ニ付七俵づゝ	
一〇年			秋諸國大旱
一一年	七五	田方よし	春江戸及諸國大旱

備考

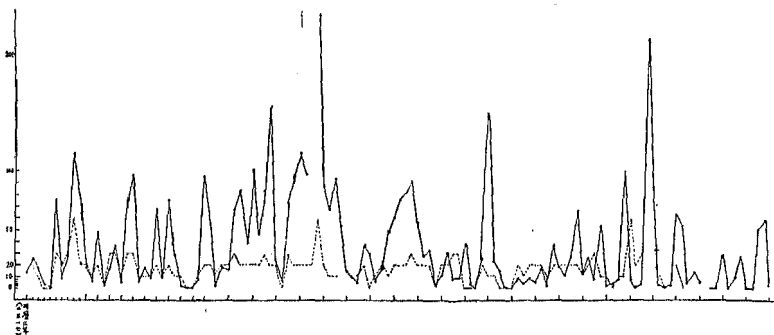
以上

一、前表最下段の參考事項とは權藤成卿編「日本震災凶饉攷」(昭和七年)に依つて比較對照のために附加したものである
 二、豊凶に關する記事中、「さこね水押」とあるは、さこねと

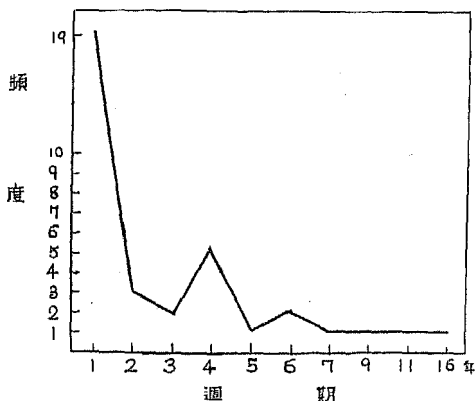
は田中村の字名であつて、田中村の西北野洲川の寄洲(氾濫原)のことで、野洲川に大出水の際は、この洲を水中に没するのである。これを水押と言ふ。同じく「浦方」とあるは琵琶湖岸地方の聚落を指す。

六

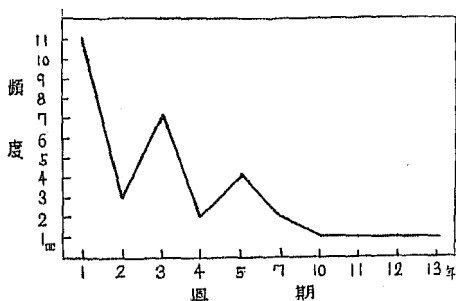
さて、以上の記録によつて、百數十年間に如何なる氣候の變化(主として氣溫)があつたかを知るために、蓮花立の多少は直ちに以て、その年の氣溫狀態を示すものと假定して、(氣溫と函數的關係にあるとみて支障はないと思ふが)、これをグラフにしてみると第一圖の如きものとなる、圖中、實線が年別蓮花立數を示してゐるのである。尙本圖は明曆三年より天明二年までの百二十六年間を示し、寛政以後の分は資料が稍不確實と思はれるので、之を用ひぬことにした。全じく、破線を以て現はされてゐるのは、農作、主として水稻の豊凶を示したものであるが、日記の記事が、ある場合は反當り收穫量が誌されてはゐるが、多くは單に「吉」とか「中分」など



第一圖



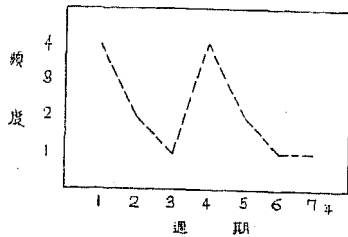
第二圖 蓮花立五〇以上の週期表



第三圖 蓮花立五以下の週期表

と言ふ抽象的な表現方法をとつてゐるために、これを數量化することは困難であるが、收穫量の記載されてゐる分より類推して、稍主觀的に

なつた嫌がないでは無いが、これを不作、中分、吉、大吉、數十年來の吉の五階級に分類して圖示したものである。一覽して理解される如く、この兩者の間には、可成り密接な關係のあることが認められるが、その理由として前述の如き事項が考へられる。これが又この蓮花信仰を生み、それを今日に持續してゐる所以である。



第四圖 水押週期表

本以上開花した年までのものは記録の性質上これを除外して、その次の分より計算すると、一〇・一二・八・三・五・三・三・一三・一三・二三と言ふ週期になつてゐる。これを若干處理すると、一〇・一二・一一(八と三と合する)・一一(五、三、三を合する)・一三・一三・一一・五(二三を二分する)と言ふ週期になつて略太陽黒點の週期と一致することになる。勿論、太陽黒點の週期は一年を前後に著しく變化のあるものであるから大體の關係があると観てよいので

次に、このグラフの

諸變化中に何等か週期的なものが含まれてはゐないかと思ひ、二三處理してみると大略次の結果が現はれた。先づ、百本近く蓮花立のあつた年の週期を調べてみると、最初の百

なからうかと思ふ。

次に五十本以上開花した年の週期を考察するに、第二圖の如きものとなつた。これに依ると二年相續いて、開花の多かつた場合が斷然多くなつてあり、四年目がこれに次いでゐる。これと反對に五本以下の蓮花立は第三圖の如きものであるが、茲に於いても、連年悪いのが一番多く、次いで三年、五年となつてゐる。

この二圖から一般的傾向を窺ふことは稍不穩當であるが、現はれた結果に依れば、多數開花の週期は四年、反對に少數開花のそれは三年と言ふことになる。二年連續的に多く咲いたり又少なく咲いたりするのは、氣溫の關係よりも寧ろ次の如き理由に依るのではあるまいか。即ち、例へばある年に多數開花したとすれば、當然その地下莖の發達も著しく、翌年餘程の氣候的變調のない限り、その發達した地下莖より亦多數の花莖を出すものでなからうか。反對に地下莖の發達しなかつた年は翌年も亦餘り花莖を出し

得ないのであるまいかと考へられる。

これを要するに以上の點よりして、甚だ漠然とはしてゐるが大體十二年の週期とその倍數なる三年四年の週期をこの僅少の資料に依つて認め得ると思ふのである。

尙、「さこね水押」と記載されてゐる部分より雨量に關するグラフを作れば第四圖の如くなつ

た。「さこね水押」とは先にも一言した如く、田中村の北西に當る野洲川の滑走斜面に野洲川大出水の際に溢水することを指すもので、野洲川上流地方（近江、北伊勢）一圓の降水の多量なりしことを物語るもので、この週期が四年並に一年となつてゐる。（完）

安藝の名勝二級峽及白糸瀧（二）

吉 野 益 見

四、二級吊橋下流の景

二級橋にて二級峽盡き兩岸開き田圃横はり豁然として氣開き神舒ぶ。橋の下流には巨岩多く起臥し點々島嶼の如く、清流は巨岩に激して滔々白沫を飛散し、更に又急湍奔瀨をなし轟々白龍の飛躍するに似た頗る壯觀を呈す、是れ河床

の一勝景なり、鮎其他川魚の潑刺たるを見る。こゝより千數百米間の河床には巨岩横はり、又大小の磧地存す、後者は島嶼狀をなし、或は畑地をなし、或は土石の裡草木の繁茂せるものありて單調なる河床に一變化を與ふ。又左右兩岸に注ぐ溪流には小瀑多く懸り其數二十を超ゆ、左